
スケッチブック

seiron

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スケッチブック

【Nコード】

N3323D

【作者名】

seiron

【あらすじ】

年末の部屋の片付け。去年出来なかった分もしてしまおうと手をつけるが、そこに彼女は居た。

「スケッチブック」 作：seiron

年末になると、散らかり放題になつてゐる部屋を片付けることになつてた。去年はちよつとしたハプニングでそれ所じやなかつたから、2年越しに片付けることになる。

机の上で開きっぱなしになつてゐる教科書や、部屋の片隅に放り捨てられてゐる使用済みノート。山積みになつた週刊誌に、何度も読み返した観光名所に関する冊子、そして……何冊にも及ぶスケッチブック。

子供の頃から絵を描くのが好きだつた。描く事が好きつて言つと語弊があるかも知れない。

都会とはとてもいえない、今でも農家が数多く住む田舎に生まれ育つた俺は、子供の頃から友人達と森や川で遊ぶことが多かった。俺自身外は嫌いじゃなかつたし、川の流れに足を浸すのは気持ち良かった。

皆と一緒にゐてはしゃがない事だけが心掛かりだつたけど、それでも楽しいと思えた。

ある日、岩に腰掛け、川で盛大に転んだ友人の姿に笑う俺の元に「じゅうちょう」と描かれたノートと鉛筆が差し出された。近所に住む、一つ年上の女の子だ。

「貸してあげる」

一緒になつて遊べない俺へのことを気にかけてくれたのかは不明だが、そう一言を添えると彼女はノートを置いて川へと走つていつてしまった。ふと振り返り、「後で見せてもらうからね」と命令口調で言われたことは鮮明に覚えている。

毎日毎日、どこに遊びに行つても座つてゐる俺へ、押し付けられる「じゅうちょう」と鉛筆、そして彼女の言葉。いつの日

にかそこに走り回る友人達や、巢作りをする小鳥達の絵を描くのが日課になっていた。

お世辞にも「上手い」といえない絵に何度も笑われた事も今となってはいい思い出だ。

中学、高校へと進学するにつれて「じゅうちょう」は「大学ノート」に、「大学ノート」は「スケッチブック」とだんだん大きくなっていった。特に部活に入ることもなく、一緒に遊ぶ友人達も居ない中、俺は毎日絵を描いた。

「ほう？ 今日の子猫だねえー？」

なかなか可愛いじゃんつ、私にそっくりじゃない？」

「嗚呼、なんてかわいそうなにゃんこ……！ こんな山猿と一緒にされるなんてえ！

痛い！ 痛いです！ お願いだから関節技だけは止めてくださいませ！」

日が暮れる頃に彼女の元へと、今日一日描いた絵を持っていくのも日課の一つだった。彼女自身は男勝りの性格からか、ずっと空手部に所属していて、彼女との繋がりなんてこのスケッチブックくらいだった。

「じゃ、明日の朝ポストに入れとくから」

彼女は俺の描いた絵を吟味した上で裏に感想を綴る。しかも何故かミニ小説まで付け加えて来たのだから、隠れた才能に驚いたものだ。その内容が俺のイメージと一致してしまうのだから、長年の付き合いというものは恐ろしい。

その物語については一切感想を求めない、というのが彼女のモットーらしいのだが、彼女の言葉を押し切って褒め倒した時、顔を赤く染めながら回し蹴りを打ち放った事は永久保存決定済みだ。スケッチブックを手を取ったまま、昔を思い返している自分にふと気付き、慌てて再び手を動かし始める。去年のアレ以降、俺は絵を描くことを止めていた。子供の頃から描き溜めたノートも散らかりっぱなしだ。

ふと、皺くちやになったスケッチブックが目に残る。
一番最後に書いた絵が今も微笑んでいるはずのスケッチブック。

あの日、彼女の家へ向かった道、偶然にも聞いてしまった彼女の転校。明日には遠く離れた街に引越し、再び帰ってくることはないという事実。耳を疑って立ちすくんでいる俺の元に部活帰りの彼女が現れ、俺はスケッチブックを地面に叩き付けると彼女の元から逃げるように去った。

無言のまま俺を見ていただろう彼女の気持ちは、ずっとわからなかった。彼女は翌日大きなトラックに荷物を詰め込むと、そのまま出て行ったと母親から聞かされた。

どうしてこんなところに……。
手に取るそれは汚れていて、付いた土は乾燥しきっていた。

ページを捲る。最初に滝から落ちる大木が見え、そして親鳥に餌をせがむ小鳥、畑に苗を植えるお婆さんにはしゃぎ回る子供達。

そして、いつものように笑顔でスケッチブックを受け取ってくれる彼女……。

いつまでも一緒に居ようと、居てほしいとこの絵と共に想いを伝えるつもりだった、最後の絵。

残酷なことに、最後に見た彼女の顔はこの絵とは異なったものだった。

ページを捲る、淡い希望だった。もしかしたら、彼女が何か書いてくれているのではないか、俺に別れも告げず、去っていった彼女の言葉があるのではないか。そんな期待を抱いた。迎えたのは謝罪の文章と、いつものように絵への感想。

「あんたの考えてることなんて、絵を見たら一発なのさ」
そんな彼女らしい言葉と共に、いつもの用に短い小説が書かれていた。内容は突然離れ離れになってしまった男女の物語。想いを伝え合うことなく、確認しあうこともなく、会うことがかな

わなくなってしまった二人。互いに違う道を歩みながらも、いつか再会できることを胸に生きていく二人の物語。

「……久々に絵でも描こうかな」

家を出る際に親に怒鳴られたが気にしない方向で足を進めた。

「え、ちょっと、これ多すぎだよ」

そんな困ったように笑う彼女の顔をいつか見るためにも、何十冊でも描いてやろうと思う。

運良く降り始めた雪は初めの絵を飾るのにちょうど良かった。雪は全てを一度覆い隠してしまうけれど、いつの日か下に咲いた花に出会える。

俺達もいつか、そんな日を迎えられることを信じて。

おわり。

（後書き）

作者より　くく　部屋の片付けをしていて、なんだか切なくなっただけで書いてみました。ノートにいろいろ書いてあったので「こんなことあったなー」って思ったのがキツカケなんですけどね。俺的にはハッピーエンドにしたいのですが、世間はそんなに甘くないとです（笑。半年振りぐらいに、書き終えたって点では一年ぶり以上なのですが、案の定文章力なくて申し訳ない。この一年、いろいろありましたでしょうが、気分を変えて新年を迎えられますように、さやかながら祈らせていただきます。では、読んでいただきありがとうございます。）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3323d/>

スケッチブック

2011年1月19日04時27分発行